



中部圏の未来を創るZ世代のための特別な三日間「Z世代ナゴヤ未来会議」をナゴヤ イノベーターズ ガレージで開催した。マーケティング・SDGs・イノベーションの専門家や先輩イノベーター、多方面で活躍する学生をゲストに迎え、高校生・大学生・社会人(16～27歳)ら延べ253名が本音を語り合った。

開催目的

近年多様性やカーボンニュートラルの必要性が叫ばれる中、製造業主体の中部圏では、危機感の低さや変化を躊躇する保守的な考え方から、社会課題解決に向けた行動に移せていない傾向にあると言われる。一方、今後の日本を背負っていくデジタルネイティブのZ世代の中には新たな価値観をもち、課題解決に向けた活動を実践している人々もいる。これを多くのZ世代で共有し、動き出すきっかけにするとともに、既存社会への提言をとおして中部圏の活性化を目指していく。

実施内容

WEBを活用したアンケートや意見投稿などにより、会場参加者とWEB参加者をつなぎ、日常生活・社会課題・未来などについて意見を交わした。また、モデレーター(総合MC)や各日のゲストは、参加者と同世代あるいはごく近い世代とし、本音を引き出しやすい環境を整えた。

Day 1 ◆日本の今と未来を語る

ゲスト：(株)SHIBUYA109

SHIBUYA109lab. 所長 長田 麻衣 氏 他

**目標が無ければ好きなことを積上げていけばいい。
選択肢が溢れる時代の幸せの基準は“自分の納得感”**

仕事・結婚などに関するアンケートをもとに、自由に意見を交わした。「就職活動」「将来設計」「自己肯定感」など、議題以外へのテーマに派生するなど、活発な議論が展開された。

長田氏：一つのテーマに正解が一つではないのがZ世代。その考えに世の中も近づいてくるとよい。Z世代もその特性を活かし、さまざまな考え方や選択肢を吸収して自分の人生やキャリアをよりよいものにしてほしい。

Day 2 ◆SDGsで社会課題に向き合う

ゲスト：(株)笑下村塾

代表取締役 相川 美菜子 氏 他

SDGsに身近な感覚をもつZ世代。17目標では教育を重要視しつつ、日頃の行動は環境問題を意識

SDGsを意識する頻度や、中部圏企業の取り組みに

対して思うことに加え、今後自分が起こしたい行動などについて議論を行った。登壇者の体験にもとづく意見に触発された参加者から、率直な意見があがった。

相川氏：若い世代の頑張り刺激をうけた。SDGsのメリットが不明という声も多く、今後のビジネスや活動における付加価値や、ポジティブな発信が重要だと感じる。

Day 3 ◆イノベーションを考える

ゲスト：一般社団法人SWITCH

代表理事 佐座 マナ 氏 他

地元・安定志向は強めだが、既存の枠組みへの疑問や新たなチャレンジへの意欲を大半のZ世代が持つ

中部圏の強みと弱み、イノベーションの可能性について、自分自身が起こしたい行動も含めて議論を行った。大半のZ世代は、自分たちが住みやすい社会を創り出す意欲を持っており、今後の具体的なアプローチを期待したい。

佐座氏：従来のものを改善し普及させるのも大切。中部圏は産業が集まっている地域故に、マインドセットをすればイノベーションを加速できる可能性はあると思う。



「ビヨンド ザ ボーダー2.0」は、企業変革、イノベーション創出を目的とした“本当にやる”ための戦略デザインの実践、人材育成プログラムである。新たな価値の創造を社内で推進していく「イノベーション人材」を育成し、異業種とのコラボレーション、ネットワークの拡大を図ることを目的としている。本プログラムは各企業が抱える課題の解決を目標として各社1チーム最大3名で参加、実践形式で新規ビジネスの戦略を立案し、プログラム終了後に関係者を巻き込んで、新規ビジネスの実行につなげていくことを目的としている。

実施内容

- 毎年度、年2クール（5～9月、10～2月）開催。
- 今年10月にスタートした第3クールでは、7社21名の参加者が戦略デザインの実践を行っている。イノベーションの基礎からはじまり、各社の置かれている状況や課題を整理し、リサーチや仮説の設定を進めてきた。現在、各チームのトップにインタビューを行い、対話を通じて自分たちが考えた仮説を検証している。今後、各チームで新規ビジネスの戦略を創り、精査を重ねていくとともに、戦略の実行につながる学びを進めていく。
- なお、本プログラムでは「公開セッション」として、参加チームと起業経験者や企業の新規事業担当者との対話の場を設け、広く公開している。「先進的に活躍されている方の話を聞き刺激を受けた」と大変好評を博している。

受講者の感想（第2クール参加者アンケート結果）

- 約87%の参加者が「プログラムに大変満足した」と回答した他、すべての参加者が「戦略を実践していく&社内で稟議を上げて実践する見込み」と前向きな意向を示した。
- 「新規事業案の事業化に向けて仲間と励ましあい、実践的に学ぶことができた」「3か月を振り返ってみてまるで違う考え方になっていた」の他、「当初想定していた以上の新規事業案に仕上げることができた」「新たな出会いの機会を作っていただけたのでとても満足している」など肯定的なコメントを多数いただいた。



イノベーション人材育成プログラム ビヨンド ザ ボーダー2.0

公開セッション
参加者募集中

◆第3クール・第3回公開セッション（2023年1月18日（水）開催）のオンライン参加者を募集中です。

参加を希望される場合は、ナゴヤ イノベーターズ ガレージHP (<https://garage-nagoya.or.jp/>) のトップページより、お申込みください。

◆プログラムの詳細は、<https://garage-nagoya.or.jp/program/p7845/>をご覧ください。

まずはお気軽にお問い合わせください。プログラムの詳細を紹介させていただきます。



お問い合わせはこちら
お気軽にご相談ください ▶

E-mail : beyond@garage-nagoya.or.jp TEL : 052-253-9758

担当：ナゴヤ イノベーターズ ガレージ 山本・高橋

Report 3
2022.11.17 Thu.
第24回アカデミックナイト

参加者：9名

プログラム「アカデミックナイト」は、第24回として「進む小型衛星開発—宇宙ビジネスの可能性—」をテーマに開催した。

講演1：小型宇宙機システムを用いた宇宙利用機会の拡大

【講師】名城大学 理工学部 交通機械工学科 准教授 宮田 喜久子 氏

プロフィール／2011年九州大学(博士(工学))、2011～2014年次世代宇宙システム技術研究組合研究員、2014～2020年名古屋大学大学院工学研究科研究員、特任助教、助教を経て2020年より現職。専門は航空宇宙工学(小型宇宙機システムおよび関連技術)



【講演要旨】

小型宇宙機システムと宇宙ゴミを取り扱う力学を主に研究した後、小型宇宙機を実際に制作し、産業化するプロジェクトにて回転制御や通信に携わった。その後は宇宙機の熱制御など、さまざまな分野の制御に触れてきた。

近年、超小型人工衛星という費用対効果の高い宇宙機が宇宙ビジネスの敷居を下げる新たなコンテンツとして注目を浴び、多くの企業が参入している。これまでは宇宙機需要のほとんどが官需であり、主な利用が赤外線カメラによる画像撮影であった。

アメリカの調査会社によれば、小型宇宙機の需要予測は年々伸びていくとされており、将来予測では官需よりも民需の方が伸びる予想となっている。

現在、多くの人々に宇宙を利用してもらうため、より安価で短納期な超小型宇宙機の研究開発を進めている。小型宇宙機の利活用事例を増やすほか、大量生産や運用を見据えた開発や運用効率化、自動・自律システムの設計、小型・軽量化を促進する技術開発、相変化蓄熱材を用いた、より安全なシステム設計を補助するための各種設計開発、実証提案を行っている。

近年、宇宙ベンチャーと言われる企業の多くは、代表が次世代を担う30代～40代である。小型宇宙機の利活用や小型軽量化はまだ未知数であるが、手のひらサイズの衛星開発や宇宙ビジネスがより身近になる未来を目指している。

講演2：極超小型衛星キューブサットをビジネスに利用するための試み

【講師】愛知工科大学 工学部 電子ロボット工学科 教授、宇宙システム研究所 所長 西尾 正則 氏

プロフィール／1980年名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程中退、その後、名古屋大学空電研究所助手、国立天文台電波天文学研究系助手、鹿児島大学理学部助教授、鹿児島大学理工学研究科教授を経て、現職。



【講演要旨】

2010年以降、宇宙に向かった8機の極超小型衛星の開発に携わってきた。研究テーマは、機能を載せられるだけ載せて大きくした衛星ではなく、量産品としての超小型衛星開発の提供であるが、電子部品の小型軽量化や電力確保が課題となっている。現在はキューブサット(重量数キログラムの小型人工衛星)をクラスター化するための要素技術に関する研究を進めている。

近年、衛星通信による高速インターネットはもちろん、宇宙宅配便や、衛星の光で空に浮かぶ広告、宇宙をメタバースで体感できるようにするなど、小型宇宙機の利活用の幅は広がっている。

現在、日本初のキューブサット衛星通信網の構築を試みている事業会社の技術サポートもしており、プロジェクト参画企業も集めている。